

## 大阪の日本画 初めてにして決定版、浪花の名画大集結

大阪中之島美術館

23.01.21~04.02

東京ステーションギャラリー

23.04.15~06.11



商業都市として発展してきた大阪は、東京や京都とは異なる独自の文化圏を形成し個性的で優れた美術作品を生み出した。

町人文化に支えられた近代大阪の美術は、江戸時代からの流れを、伝統に捉えられない自由闊達な表現をも花咲かせた。

本展は、妖艶で頹廢的な作風で人気を博し「悪魔派」と揶揄（やゆ）された「北野恒富」に、大阪における女性画家の先駆者で「上村松園」とも並び称された「島成園」「菅楯彦」「矢野橋村」など、明治から昭和に至る近代大阪で活躍した「約50人」の才能あふれる画家たちが終結するもので、大阪の日本画に関する史上初めての大規模展覧会である。北野恒富《宝恵籠》1931年頃上図



島成園《祭りのよそおい》1913年若干21歳時の美しき野心作で眼の描写力が卓越している。三人並んだ女の子たちに、右端に座る子の着物は、黒地に朱色亀甲繫ぎの絞り染め模様で、ぼかし技法の表現が巧身に使われたとても写実的描写である。

背景に描かれた幔幕の家紋は、実にあっさりした平面的な描写である。

北野恒富 《春餘(余)》 1920~30年 絹本着色 一幅



「恒富」は、京の舞妓を描いても浪花女の風情を持った舞妓になってしまう。それほど大阪の土と匂がこの作家には深く染めついてしまったのである。散る花を髪や肩に受け、舞妓はひとり物思いにふける長い春の日、彼女は時間の経つのも忘れたかのようなようである。初期の作家ならば、こうした風情をもっと投げやりでデカダンに表現したであろうが、すでに中年になった「恒富」は、分別と節度から情感を取り入れつつ品位を損ねずに表現をしている。